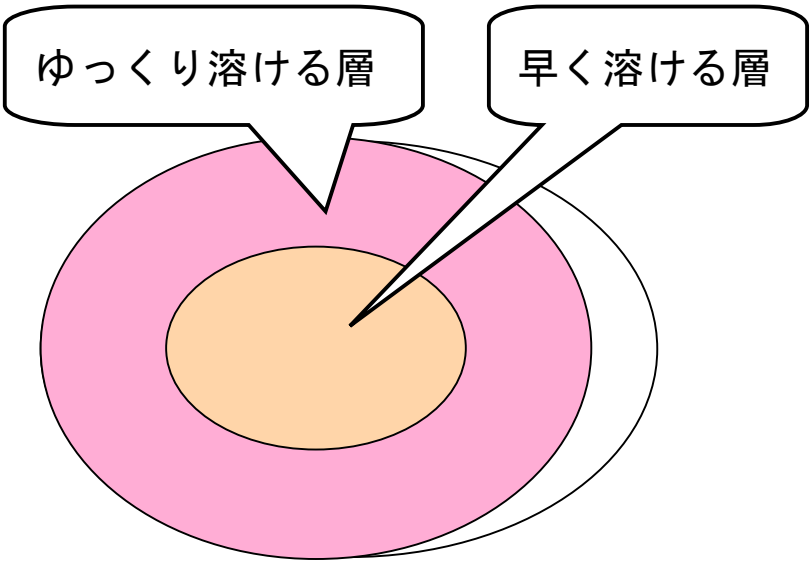
Q 問題

『かぜ薬など､1日に何回も飲むのはなんでだろう？？？』

A 解説

薬は口から飲んだ後、消化管から血液中に吸収されます。その後、身体の中を血流に乗って移動し、様々な所で働きます。体の中に入った薬はそのまま居続けるわけではありません。人間にとって薬は異物ですから外に出そうとします。そのために肝臓などで体の外に出やすい形に変え、尿などと一緒に排泄します。このようにして体の中にある薬の量は時間と共に減っていきます。しかし、風邪の時など病状が出ている期間は、体内に必要な量の薬がなければそれを抑えることはできません。ならば最初から沢山飲んでしまえばいいのではないか？と思うでしょうが、一度に大量に飲むと望まない副作用が起こりやすくなってしまいます。その為に１日に３回に分けて飲むことで、排泄などによってなくなってしまった分を補おうとしているのです。

ちなみに、最近では「朝に飲めば、夜まで効く」などとテレビで宣伝していますが、こういった薬はどの様な工夫がされているのでしょうか？　飲んだ錠剤が一度に全部溶けてしまうと、その回でおしまいになってしまいますよね。でも、薬の層を「早く溶ける層」と「ゆっくり溶ける層」の二重層にしておくと、一番外側の層が溶けて暫くしてから次の層が溶けて・・・と、２回飲んだのと同じことになるのです。飴玉でも口の中で色んな味に変わるのがありますが、あれと同じです。他にも、胃で溶けやすい膜で覆れているものと、腸で溶けやすい膜で覆れているものを１つのカプセルの中に入れておいたりと、色々な工夫がされているのです。このようにして１日に薬を飲む回数を減らすことにより、「飲み忘れちゃった！」というリスクを減らし、「何度も飲むのが面倒くさいな」といった患者さんのニーズに応える試みがなされているのです。

（回答者：佐口健一）